

先週の礼拝メッセージ(2024年4月21日) ベン牧師

「主にある者の生活」詩編 15:1-5

詩編全体を見ると、ほとんどの詩編が筆者と神との関係を示しています。しかし、この15編には、神様と私たちの関係が記されていません。その意味では他の詩篇とは少し違う感覚を読み手に与える詩篇と言えるでしょう。

「賛歌。ダビデの詩。主よ、誰があなたの幕屋にとどまり、聖なる山に宿ることができるのでしょうか。」(1節)

「とどまる」とか「宿る」というのは、神に近づき、神と共に歩むという意味です。そしてその問いの答えが、2節以降に記されているというわけです。読んでみると、道徳的に良い人の姿を示す表現が並んでいます。これだけを見て、クリスチャンは良い人でなければならないというふうに取りするのは間違いです。15編の作者は、1節にもあるようにダビデです。ダビデといえば、レントの期間にも詩編51編や32編からメッセージしたように、「全き道を歩む」とか「人を傷つけず「友に災いをもたらさず」とは程遠い罪を犯しました。律法からすれば死刑を免れ得ないものです。しかし彼の罪は、恵みのゆえに信仰によって赦されたのです。今の私たちクリスチャンが経験しているものと何ら変わらない赦しの恵みです。実は聖書は一貫して、律法ではなく信仰による救いを語っています。律法を守ることによって義人とみなされた人は存在しないのです。「正しい者はいない。一人もない。」(ローマ3:10)とあるとおりであり、救われるのはただ信仰によるのです。

「義人は信仰によって生きる。」(ヘブル10:38)

2節から5節の言葉は、律法に沿った言葉です。たとえば3節

「舌で人を傷つけず、友に災いをもたらさず隣人をそしめることもない。」

私たちは誰しも、言葉の失敗はあるのではないのでしょうか。悪気なく言った言葉や、良かれと思って言った言葉で相手を傷つけてしまうということはあります。聖書にも「しかし、舌を治めることのできる人は一人もい

ません。舌は、制することのできない悪で、死をもたらす毒に満ちています。」(ヤコブ3:8)とあるように、言葉の失敗をしないということは不可能に近いことです。それなのに、舌で人を傷つけない人が聖なる山に宿ることができると言われたら、私たちはまさにお手上げ状態です。

ではなぜ、神様は、よりのもよってダビデにこの詩篇を書かせなされたのか、。ダビデは、律法を守ることができない、いや、律法では決して救われるはずのない自分が、それでも神に信頼した時に得られた喜びと感謝を歌っているのです。

何度も申しますが、私たちは律法によっては救われることはありません。イエス様を信じる信仰によるのです。しかしだからと言って行いがどうでもいいとは聖書は言っていません。「行いのない信仰もまた死んだものです。」(ヤコブ2:26)とあるとおりです。

神様の前に出る時は、飾る必要もなくありのままが良いのです。しかし、私たちの信仰が成長していくことを神様は願っておられます。そのために神様は私たちのうちに聖霊を与えてくださり、聖霊は私たちをキリストに似た者へと造り変えてくださっているのです。だからこそ私たちは、自身が神様の前にどのように歩むべきかが問われているのです。この詩編は、2節から5節に記されている道徳的な良いことを、自分の力では到底できないことを私たちに知らしめているのです。その上で、できない私たちをそれでも受け入れてくださる神様に目をとめるように導いているのです。文字面だけを取ると、倫理的、道徳的に良い人となるということしか見えませんが、その背後には、神様の愛と憐れみが溢れている詩編なのです。神様に信頼し、神様の御名によって呼ばれている者にふさわしい歩みをするために、まずすべきことは聖霊に委ねることです。2~5節の標準は高いものです。しかし、できない自分を受け入れ、それでも愛し導いてくださる主に委ねるなら、自分の頑張りではなく、主の恵みによって成長させていただいている自分に気づくのです。ダビデと共にいてくださる神様は、今も私たちと共にいて、どんな弱さがあろうとも、律法ではなく恵みによって導き続けてくださるのです。